でなく，世界遺産の現代的価値を証明するということにおいても，遺産が持っている伝統知識が現実でもどれだけ有効利用されているかということが明らかになった（反映された）といえる」
（原文：소설이나 드라마 등 대중매체를 통해 일반인에게 친숙한 것은 인지도에 있어서 중요할 뿐만 아니라　세계유산의 현재적 가치를 입증하는데 있어　유산에 담겨진　전통지식이 현실에서 얼마나 유용하게 쓰이고 있느냐를　반영해 주는 것입니다　2021年10月3日メールより）

ということであった．やはり大衆メディアでの人気で国民への認知度が上がり，またそういったコンテンツ内で，『東醫宝鑑』など漢方医学の知識が，現代でも生きて利用されていることがリアルに実感でき，ユネスコ世界の記憶遺産登録への道につながったとみられる．

『東医宝鑑』刊行の背景・特徴

12–13世紀に，東アジア医学では新儒学（Neo-confucianism）が起こり，その思想に基づき，医療の新体制が生みだされていた．また同時に各国の医療情報を収集していた．また，印刷文化の発達に伴い，収集された情報が本として刊行されていた．代表的なものとしては，1406年に明朝で刊行された医学書『普斉方』には　6万種余の漢方薬の処方が収録されている．また，1477年に朝鮮王朝が刊行した『医方類聚』には，食事との相互作用の治験を含め約10万種にのぼる処方が掲載されている．

このように膨大な医療情報は，データベースとしての情報の蓄積という意味では非常に有意義である．しかし，実際の医療現場では活用には問題もあった．そこで，より簡潔で効果的であり，医療現場で即座に活用できる簡潔な医療情報が必要となった．16世紀以降は，そのような実際的な治療用用途に即した医学書が登場するようになった．

中国では，1515年『医学正伝』と，1575年『医学入門』が代表的である．また，日本では曲直瀬道山（1507–1597）による『啓廸集』が刊行された．そして，朝鮮では1613年に『東医宝鑑』が刊行されたが，このような医学書の中でも画期的であったといえる．漢方薬，鍼灸など，東アジアで伝統的に行われてきた治療技術を蓄積し，その中でも特に医療現場で有用なものを厳選しているため，現在の臨床現場でも役に立つ治療法が沢山残されている．単純に症状によって治療法を羅列するのではなく，疾病を人間を中心に起きる現象と捉えている．許俊（ホ・ジュン）の疾病に対する観念が反映され，許俊の医学観は，当時でも先駆的であったが，現在の医療にも生きており，刊行されてから現在まで有用な医書であるといえよう．

（令和3年11月例会）

書　評

閔凡祥 編纂
『中文医史研究学術成果索引（20世紀初至2019年）』

本書は，中国で出版された20世紀初頭から2019年にいたる百年余りの医学史研究，また文学，人類学，経済学，民俗学，政治学といった関連諸分野における研究を集めた索引集である．編者である閔凡祥氏は，現在中国の医学史研究をリードする研究者のひとりであり，専門とする近現代ヨーロッパのみならず，中国近現代・明清期の医療史研究にも積極的に取りくんできた．また，近年では欧米における医学史研究の方法論や研究成果を中国で紹介し，中国の医学史研究の成

果を欧米に紹介することにも尽力している．

こうした編者によるものだけに，本書の収録内容は，中国大陸で出版・翻訳されたものに限らず，香港・台湾において出版・翻訳された成果にまで広く及んでいる．まず，本書の構成を示しておこう（日本語訳は筆者によるものである）．

第一部分　論文索引（論文の索引）
第二部分　著作 / 译著索引（出版物と翻訳書の索引）
第三部分　医薬衛生志書索引（医薬・衛生志の索引）
第四部分　国家社科基金項目，教育部人文社会科学研究項目，部分省（市）社科基金項目索引（国家社会科学基金プロジェクト，教育部の人文・社会科学研究プロジェクト，一部の省（市）社会科学基金プロジェクトの索引）

このように，本書は四部構成になっている．各部には，以下のような書籍・論文の情報がそれぞれ収録されている．

第一部，20世紀初期から2019年までに中国の学術誌で発表された論文，修士論文，博士論文の情報
第二部，20世紀初期から2019年まで中国で公刊された医学史に関わる著書，中国で翻訳出版された日本，イギリス，アメリカ，カナダをはじめとする海外書籍の情報
第三部，中国各地域の衛生改革や発展の過程，医学教育の歴史などを記述する衛生志の情報
第四部，2019年まで「全国哲学社会科学工作弁公室」（National Office for Philosophy and Social Sciences）及び中国教育部などが交付する人文科学研究費助成事業により採択された課題

中国では，医学史文献の整理・出版が早い時期より重要視されてきた．たとえば，医史学者・王吉民氏（1889～1972）は，『中華医学雑誌』に掲載された「中国医史文献索引」（1936）をはじめ，1955年から1964年にかけて，『中文医史論文索引』1～10を編纂・刊行した．その後も，中国中医研究院中国医史文献所によって，それぞれ1978年に『医学史論文資料索引（第一輯：1903～1978）』，1989年に『医学史文献論文資料索引（第一輯：1979～1986）』，2008年に『1900～1949年間医学史文献論文索引』が公刊されている．本書は，これらの作業を受け継ぎ，さらに拡充したものといえる．とくに，前掲諸書では扱われていない，1986年以降の成果を収録したことは，本書の大きな特徴といえる．

こうした時期の成果が収録されたことには，単に新しい成果が収録されたということ以上の意味がある．この時期，とくに1990年代半ば以降は，中国における医学史研究が大きな変化を遂げた転換期であった．医学史研究は，1990年代半ばまで，主に各中医薬大学や中医薬研究所などに所属する医学系出身の研究者によって担われ，その関心も医学文献の研究，医学技術の発展史の研究に集中していた．中国においてこうした研究傾向は，医学の内部で完結する性質をとらえて〈内史〉と称されている．こうした研究状況を相対化したのが〈外史〉の台頭である．それは，具体的には，歴史・文化・哲学・政治・文学といった諸分野の知見をとりいれ，社会との関連のなかで医学を理解しようと試みた．こうした研究は，欧米や台湾からはじまり，1990年代半ばより，中国大陸でも取り入れられる．当初，こうした視座からの研究は主に中国史研究の内部で行われたが，その後，他地域を専門とする研究者も医学史研究に関心を寄せるようになっていく．こうしたなかで医療社会史という研究分野が成立し，この分野を扱う質の高い学術誌も多く創刊されることとなった．さらに，近年では，〈内史〉と〈外史〉それぞれの研究者らが研究視角，方法論，史料解読といった問題をともに議論する研究会やシンポジウムが開かれるようになり，これに基づき両者の視角をとりいれた研究成果も発表されている．

このように，1990年代半ばから医学史は，中国における歴史学研究の重要な分野として台頭し，多くの若手研究者も参与するようになった．いまやその関心は，中国医学史に限らず，欧米，日本

といった国の医学史にも広がっている．本書を繙くならば，こうした新しい成果の登場が一目瞭然であろう．

まさにこうした研究の進展が1990年代以降の研究成果をまとめる要請を生じさせたのであり，本書はこうした需要にこたえたものにほかならない．本書の登場により，こうした重要な転換期から今日にかけての成果を容易に検索できるようになったのであり，それは単に新しい文献を収録したにとどまらない，重要な貢献といえるだろう．すでに触れたように，本書では，中国国内で発表された論文・著書のみならず，研究プロジェクトや海外の成果を翻訳したものまでが収録されている．すなわち，20世紀以降における中国大陸・香港・台湾における医学史の研究史，研究動向を把握するうえで，本書ほど的確なものはないであろう．

以上が本書の大まかな内容と評者が感じた本書の魅力である．今後，本書がさらに多くの医学史研究に関心を持つ人々に利用され，そこから多くの意義が見いだされることを心から願う．

（向　　静静）

［北京：人民出版社，2020年12月，A4判，2,258頁，698元］

青木歳幸，W・ミヒェル 編
『天然痘との闘いⅡ【西日本の種痘】』

青木歳幸氏を代表とする科学研究「我が国種痘伝播と地域医療の近代化に関する史料集成を軸とする基礎的研究」の成果が【西日本の種痘】として取り纏められた本書を紹介する．2018年発刊された『天然痘との闘い【九州の種痘】』については鈴木友和氏による書評が本雑誌第65巻1号に掲載されている．それに継続した研究の成果が次の目次により編まれている．

序章　西日本の種痘　青木歳幸
総論
1. 牛痘導入の黎明期におけるゴルトシュミット著『牛痘と種痘の慨史』の受容　W・ミヒェル
2. 上方蘭学の草分け吉雄元吉　W・ミヒェル
各論
1. 長州藩と山口県の種痘　中澤　淳
2. 松江藩における種痘の始まり—松平家文書を中心として—　梶谷光弘
3. 鳥取藩地域への牛痘苗伝来と普及　海原　亮
4. 広島藩領の種痘　青木歳幸
5. 備前・備中の種痘　木下　浩
6. 岡山における種痘の「終わり」—明治初期在村医の種痘活動—　松村紀明
7. 伊予の種痘　井上　淳
　コラム1　讃岐の種痘医たち　青木歳幸
8. 阿波の種痘　古西義麿
9. 土佐の種痘　古西義麿
10. 大阪除痘館と備中足守藩除痘館—緒方洪庵開設による足守除痘館の基本性格をめぐって—　浅井允晶
　コラム2　官許された大阪除痘館　川上　潤
　コラム3　京都有信堂の種痘　有坂道子
11. 近江の種痘　古西義麿
　コラム4　牛化人痘苗の作出と小山肆成　浅井允晶

加えて青木歳幸・田中美穂・木下浩の各氏による史料編が掲載されている．

先行する【九州の種痘】から編者を務めているW・ミヒェル氏の総論により，江戸時代中期の日本に於いて人痘種痘の知識や経験が，日本の牛痘種痘の迅速な日本各地への伝播における基盤として江戸の幕藩体制の中で共有されていたことがよくわかる．前書を含めて，ミヒェル氏が多く書かれているH.G.ゴルドシュミットの1801年発表の『牛痘と種痘の歴史』（オランダ語版）が日本における種痘導入にあたり多くの蘭学者により翻訳されて